

禪の友

Zen no Tomo

5

May 2026





ご本山だより

大本山永平寺

【新到掛塔式】

大本山永平寺

福井県吉田郡

☎〇七七六一六三一三二〇二



永平寺では毎年五月一日に新到掛塔式しんとうかたせきが行われます。新到とは、新たに修行道場に到着した僧のことです。掛塔かたとは行李りや網代笠あじろかき、衣や器など修行に必要なものを各自の所定の場所におさめる事を行います。この儀式をもって新到は正式にその道場の一員となります。

今年は二月から四月までの間に約七十名の修行僧が新たに上山してきました。掛塔式を迎えるまでの間は、彼らは暫到ざんとうと呼ばれて過ごします。暫到とは、しばらくの間滞在している掛塔をしていない僧ということです。この期間中に、生活習慣や作法、規則などを集中して身につけていきます。永平寺での生活は衣食住の全てが変わります。言葉遣いや歩き方

などでも変えていかねばなりません。それまでの自由気ままな生活から、自己を手放し仏の教えに従う生活へと変えていかねばならないのです。永平寺の修行の厳しさとはまさにこのことをいうのでしよう。

雪が積もる山門に立つてから一、二ヵ月。すっかり暖かくなったこの日、彼らはいよいよ正式に永平寺の一員と認められます。新到掛塔式を迎えたものたちは一様に険しい顔をしています。なぜならば、これで終わりではないからです。

次に踏み出す一步は、これから始まる新到としての第一歩、ひいては生涯にわたる仏道修行において大きな節目になる一步なのです。



ご本山だより

大本山總持寺

【学校授戒と五則】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎ 〇四五―五八一―六〇二一



五月七日から八日にかけて恒例の学校授戒会が行われます。総持学園鶴見大学附属高校の三年生が本山で坐禅や聞法を行じ、尊い仏さまの教えを学びます。授戒会の最後には石附禪師さまから親しく戒法を授けていただきます。学生がお授戒を経験できるのは全国的にもたいへん珍しいことです。

また、總持寺本山僧堂ではこの春に上山した新到四十余名が加わり、夏安居という修行集中期間に入っております。

安居は夏と冬の二回行われ、ともに約三カ月間続き、お釈迦さまの時代に起源を発する行持で、もともと「雨安居」を意味しました。インドでは雨期になりますと、托鉢などで心ならずも小さい虫などを踏み殺すおそれがあるため、外出を控え一箇所（寺院など）に留まって坐禅修行に集中しました。これが後に

中国から日本と継承され、現在では安居と称して修行道場で行じられています。

今夏安居において、「五則」という行持が行われます。五則中に行われる行持は、楞嚴会啓建・土地堂念誦・法堂並びに僧堂入事行札・巡察・大布薩講式など、曹洞宗の歴史と伝統を相承した重要なものばかりです。

曹洞宗の伝灯を正しく相承し、後世に伝えて行くことも、修行の眼目といえます。

そのクライマックスが「首座法戦式」です。今夏安居の間、修行僧たちの先頭に立つ首座が石附禪師さまの命を受け、二十五名の修行僧と法戦問答を繰り広げます。

法戦式は、緊張感みなぎる真剣勝負の大問答です。首座は全力を挙げてこれに臨み、千畳敷の大祖堂に問答の力強い声が交差し響き渡ります。

選・坊城俊樹

空気入れ弾みぬ春の車椅子

長野県 森山 昌子

評 これは車椅子の車輪の空気のことを言っているのだろう。きちんと入っていれば車輪もまた軽快に動く。春の景色の中にそれは楽しい動きを見せるのだろう。車椅子の句はいつも病や怪我の句ばかりだが、こんな楽しい景色の句は初めて見た。

尾白鷺河口の先は駿河湾

静岡県 小川 健治

評 尾白鷺が真冬の河口を舞っている景色ととらえた。その景は雄大でその鷺にふさわしい。「鷺」という季題は冬のもの。やはり普通の鳥とは異なり、さまざまな物語があるかのように感じる。この鷺には果たしてどんな物語が待ち構えて居るのだろうか。

◆ 山祇の枝の傑作滝つらら

島根県 藤江 堯

◆ 涅槃図のみな影持たぬ人けもの

愛媛県 井上 征郎

◆ 山門の耀ふ文字や彼岸寺

島根県 金山 陽

◆ 古古米を塩でむすんで春山へ

長崎県 崎田 定雄

◆ 冬ぬくし生成り帆布のスニーカー

埼玉県 伊藤 博

◆ 工事音土と春とを掘り起こし

山口県 稲村 みどり

◆ トランペット冬に別れのごとく吹き

三重県 苅屋 奈良美

◆ 棒杭に長靴干すや春の土

神奈川県 佐野 勇

◆ 春シヨールすけて美し鎖骨かな

兵庫県 松井 弘子

◆ 佗助に老いの心を覗かれり

静岡県 堤 千春

選者吟

紙ひとつ春蝶となり路地に消え

俊樹

作句小見 道路を歩いていたら紙かと思っていた物がヒラヒラと蝶になった。まさに春の蝶めきて柔らかで頼りなさそうでもある。その路地とは実は街中のそれであって、その蝶はその先どんな運命になるのか、一抹の不安もありながら見送った。

選・長澤 ちづ

雪融けを待ちかね畦に芥摘めば根に温
もれる早春の泥

鳥取県 徳本 義則

評 雪融けはなかなか進まないけれど、摘んだ芹の根に付いた泥には温もりが有ったと詠う。摘んだ芹の根の泥の温もりを捉えた濃やかな感性におどろく。春を待ちこがれる気持ちの強さが詠わせたのだろう。

水郷を手漕ぎの舟にゆく岸の刈田のひ
つじ穂頭を垂るる

愛知県 館 一子

評 手漕ぎの舟から岸の刈田を眺めて居る視点に情緒を感じた。ひつじ穂が実っているという景色も珍しく、調べると実っても中身の無い空穂が多いとのこと。

◆ わが身にはなに一つもの不平なく八十路迎える天膳膳と
埼玉県 丸山 劫外

◆ 生きて在る確かな証し投票所に入場整理のハガキ一枚
兵庫県 前田 あつ子

◆ 帰省した孫は早くも寒の潮ハバノリ摘みに出掛け行きたり
静岡県 杉原 民子

◆ 履くことはなき靴なれど捨てられず年の初めの朝に磨く
静岡県 高尾 善五

◆ 九十の母と仕込みしイズン漬け叱ってくれたりほめてくれたり
北海道 杉山 桂子

◆ 剣山に梅の実押しつけ甘露煮の鍋もつ妻に渡ししてゆけり
島根県 宮廻 恒雄

◆ 川霧が雪霧となり嶺々の見え隠れして墨絵の世界
秋田県 高橋 カツ子

◆ 星空を往き来してるか亡き夫は今宵シリウス瞬き著し
北海道 加藤 智子

◆ 亡き妻のやさしさえくぼ惚ぶとき数珠持つ指を春風包む
山形県 松谷 忠和

◆ 水沢の書道展へとドライブに山峡やまがけの空が大きく開く
岩手県 千葉 喜恵

選者詠

無造作に冬の陽束ねる所有りさねさし相模

水平線上

ちづ

作歌小見

丸山さんの作の結句「天膳膳」の在るがままを大切に何物にも捉われない精神の在り様に感動しました。四句目までの心境を見事に収める結句。高尾さんの一首は、断捨離とは程遠いことながら、物を大切にしている精神も失いたくないもの。